

三、組織の民主性
 四、行事の実践性
 ——を主眼とし、人間形成を目的とした宗教法人「人間禅教団」を、昭和二十三年十月一日に設立した。
 つまら、老漢は、新たな道を「人間形成の禅」すなわち「人間禅」とした。法輪では、修行のあ



形稽古に励む宏道会の青年会員

り方やその基本は、「清規」「三省顧之」「五戒」「三禁令」「食前の文」「食畢の偈」などをあらたに制定。食輪に関しては、僧伽を結成。団員制度を確立。また教団運営は、基本的に、入門・入団した団員の団費によってまかなわれた。
 宏道会は、この「人間禅教団」の附属である。

この宏道会をつくった人々は、耕雲庵・英山老師（人間禅教団創立者、妙峯庵孤唱老師（前人間禅教団総裁、宏道会初代会長）、小川忠太郎氏（警視庁名誉師範）、故笹森順造氏（小野派一刀流宗家、故石田和外氏（元全剣連会長、元最高裁長官）、そして現在の長野善光会長の六人である。宏道会では、後統の栗山敏司氏はじめ若い求道者たちで盛り上がっている。ちなみに栗山氏は、小学五年の時から二十年間、道場に通い続け、昭和五十四年（当時26歳）にはみずからの意志で、8時間の立切り稽古を実現した。宏道会とは、つまりこういう道場生が出るころです。段や試合を目的にしない稽古でも、真剣に熱心に続ける若者がいる」と、小川忠太郎師範も太鼓判を押した。

最後の一本が「本当の」一本

宏道会の稽古は、このほか、激しい。先ず、坐禅に入り、雑念を払いのけること。「一日一炷香」、約四十五分。それから「五戒」の朗唱。続いて、小野派一刀流の組太刀の形。その後で、直心影流法定の形四本に入

る。
 防具をつけての稽古はそのあとである。宏道会で使用する竹刀は三尺六寸以下に定められており、古い会員はすべて、三尺九寸のものを三尺四寸または三尺二寸につめて使用している。これは「防具稽古は古流の形の応用」という精神にもついている。

ここでの稽古は、切り返し中心である。小川師範の指導の下に、激しい切り返しが続く。若い会員の中には、「一回の切り返しが百本あります。ヘトヘトになり、腕が上がらなくなり、さらに、声も枯れて出なくなります。でも、終わった後のうれしさは、一時の苦しさなど忘れてしまいます」と、切り返しの感想を語っていた。たしかに、切り返しは、打つ者がヘトヘトになるまで、道場内を四回ほど前後する。ヘトヘトになったところで、正面打ちを一本やる。その後、また百本近い「切り返し」である。そして、最後に正面打ち一本で終了する。所要時間は一人約七、八分。ヘトヘトになる。小川忠太郎師範は、この「切り返し」の重要性をこう力説する。

「剣は、どうしようもないほどヘトヘトになり、動きがとれなくなつた最後の一本が、本当の一本である。無我の一本である」
 打たせる方も、相手の息が止まるまで切り返しをやらせ、どうしようもないところまで追い込んだところで、正面を打たせる。
 そこには、「剣は無我になる修行である」とする剣禅一致の理念が生きている。
 宏道会の長野会長は、徳育を強調する剣道家の一人だが、単に、竹刀競技にこだわらぬ「理事一致」をも説く。
 それは禅で「理」をわり、剣で「事」をぬる修

行であるという。つまり坐禅をやると、「眼が外より内側を見る」ようになり、人間形成につながる。さらにこう言って、現代剣道を力説する。

「戦後日本の教育は、敗戦という未曾有のショックによって、日本古来の伝統ある教えをも見失い、かつまた、過去の短所を改めるに急切に過ぎたがため、その長所をも含めてこれを無視したきらいがなきにしも非ずと思われず。私は自己の体験から、青少年には大自

然の豊かな環境の中で、知育・徳育・体育のパランスのとれた人間形成教育がなされなければならぬ」と思っています。
 最近の世相と青少年の言動を見ますとき、戦後の教育が戦前の教育にまざっているとは思えません。それは一体なぜでしょうか。これはすでに多くの人が指摘している通り、戦後の教育は知育・体育に偏して、徳育がなされていない結果です。しからば徳育は何によってなされるべきか。これはやはり、東洋の宗教、即ち仏教・儒教・神道などと、日本古来の芸道即ち武道・茶道などというようなものに依存するのが最も妥当であり、手っ取り早い方法と申せます。日本人が古来から伝承された武道の修練によって、

修行奨励のため 独自に段級位を制定

本当の日本人となることが、日本国家のためであり、同時に世界平和に貢献することになるのです。例えば、初心者である。



小川忠太郎師範



相手が少年でも氣迫に奪わりはない

初心者は大人も子供も、三年間は、防具をつけさせない。稽古は、稽古着と袴のみ。「切り返し」と「かかり稽古」それに小野派一刀流の形のみである。
 稽古は、三年以上修行に精励し、切りかえしと小野派一刀流組太刀十本以上を修習したる者で、審査の結果相当と認められる者に与えられる。
 修練段は、四年以上修行に精励し、修習級の課程を経て、掛り稽古を修練し、小野派一刀流組太刀十本以上を修習したる者で、審査の結果相当と認められた者に与えられる。
 修体段は、五年以上修行に精励し、修練級の課程を経て、三角矩定まり、小野派一刀流組太刀五十本を修習したる者で、審査の結果、相当と認められた者に与えられる。
 修技段は、七年以上修行に精励し、修体級の課程を経て、「事」の修行を究め、小野派一刀流太刀百本を修習したる者にして、審査の結果相当と認められた者に与えられる。

妙位は、十年以上修行に精励し、修技級の課程を経て、事理一致を究め、小野派一刀流組太刀を修得したる者にして、審査の結果、人物・識見相当と認められた者に与えられる。
 離位とは、長年にわたり修行に精励し、妙位の課程を経て、事理双忘の奥儀を究め、審査の結果、師表たる人物・識見相当と認むる者に与えられる。これら各級の段位は、いずれも創立記念日の八月に、全員の前で与えられる。
 もちろん、宏道会の段級位と、全日本剣道連盟または大日本武徳会の段級位と比較はできない。し